

毎朝起るとすぐ、昨夜の夢を考へ出して夢の日記帳に記録して置く。そして一年も経つてから、それをくり擴げて見ると、極めて面白い。併し普通の日記と引き合はせて見れば一層面白からうと考へる。

(をばり)

さみだれの

雲間の月も影ふけて

露けき庭に

さぶ整かな



史
傳

津崎矩子

下村三四吉

井伊直弼が大老の職に就きしより、内治の事といひ、外交の事といひ、共に尊攘黨の志士の企望に反せることのみ斷行せられしかば、幕府非難の聲大に高まり、直弼は之を鎮壓せんことを圖り、衝突の機既に發せることは、前述の如し。この頃水戸の士に日下部伊三次といふものあり。水戸邸の留守居鶴飼吉左衛門、京都成就院の僧月照及びその他の諸有志に結び、三條近衛等の諸公卿に謀り、水戸に勅命を下し、以て幕府の政事を改革せ

しめんことを計畫せり。その議遂に行はれ、内勅は八月八日(○安政)を以て下され、鶴飼吉左衛門の子幸吉之を奉じ、日下部も亦同伴して京都を出發し、同十六日江戸に着し、小石川なる水戸邸に就きて、傳達せり、勅誼の要旨は、幕政欲慮に副はず、宜しく更に群議を盡して内外の治を正すべしといふに在り。廷議は、更に屋張、越前、薩摩、安藝、長門、土佐以下の十三候に勅を下して、同様の意を諭し、共に力を水戸に合せしめらる。また、同一趣旨の勅書は、十九日を以て幕府にも下されぬ、この事につきては、近衛忠熙公、廟堂の上秘密の間に周旋し、また、村岡も志士の紹介その他に關し、力を致せること少なからざりしといふ。

幕府勢權の振張策を執れる伊井大老は、朝廷が

幕府を以て依頼するに足らずとせらるる如き勅諭を拜受して恰も挑戰狀に接したるが如き感となせり。さなきだに、反對黨の壓服を圖りし大老は豈安然として、かゝる事態の進行に一任し了らんや。

老中間部詮勝は、大老の命を受け、開港の勅許を請はんが爲めに、その九月三日を以て上京の途に就けり、然れども、詮勝の上京は、むしろ反對黨の逮捕を以てその主眼とはなせるなり。詮勝の着京に先だちて、京都町奉行の手にて、志士の一人梅田源次郎を捕縛し、大に糾問するところありて、その連累者を探知したり、ついで、同月十七日には、詮勝京都に着したりしが、病と稱して未だ參朝せず、先づ悉く有志の徒を捕縛し、京都を一掃せしめたり。凡そ水戸へ下されたる密

勅に關係せるものと水戸を助けて周旋したるものとは、處士、公卿の家臣、僧徒、儒者、女流等に論なく、捕縛の厄にあひ、江戸に護送せられたり。世に戊午の難といふは、即ち是れなりけり。

さて、前にいへる僧月照は、方外の身にてありけれど、尊王憂國の念甚だ篤く、頗る近衛忠烈公の信任を受け従つて村岡とも深く相知れる間柄なりき。月照は、内勅事件につきては、公卿と諸有志との間に斡旋せること多かりしかば、幕吏は夙に之に注目し、この時先づ逮捕せんとせり。事の由密に告げ知らするものありければ、月照は心私に決する所ありしかど、近衛公懇に諭して暫く身を潜め時を待たしめんとて、これを村岡並に西郷隆盛に謀り、隆盛に托して、月照を伴うて難を避けしめぬり。隆盛乃ち九月十日の早曉に共に京都

を出發して、伏見に至り、轉じし大坂に赴きぬ。

然るに、幕吏の探索甚だ嚴なりしかば、薩摩に潜伏せしめんとて、歸國の事を決し、同月廿四日大坂川口を出帆し、鹿兒島に到着したるは、十一月の初旬なりき。されど月照は、終には、「くもりなき心の月も、薩摩海、沖の波間にやがて入りぬる」との名歌を遺し、仲冬望月の夜、西海の波間に投じて果てける悲壯の事蹟は、世の普く知れる所なれば、その詳細を述ぶるに及ばざるべし。この訃音に接したる近衛公並に村岡の心情、察するに餘りあり。

尊王の志士に深き同情を寄せたりし村岡は、亦同じ厄難を被ふるべき身とはなりぬ。翌安政六年正月、京都町奉行より召呼出しの命を受けいかなる事ぞとて、直に往きけるが、そのままに拘留せ

られ、ういで二月の末に及び、網乗物にて江戸に送られたり。七十に餘れる老婦人、かかる憂き目を物の數ともせず、悠々安適して、胸中餘裕あり。

日々にかはる旅路に、かはらぬは、

人のこのころのまことなりけり、

との途中一首の詠歌は、以てその綽然たる襟度を見るに足らん。

近衛公は、村岡が京都を出で、江戸に送られける後、之を懐ふの情願る切にして、歌を詠じて意を述べぬ。

すさまじく荒るる東の空さして

ゆくさきいかにならんとすらん

一すぢの道のまことをしるべにて

わづまの山もやすくこゆるん

げに、村岡は、わづまの山もやすく越えて、恙な

く江戸に到着せり。されど「ゆくさきいかにならんとすらん」

(次號にて完結すべし)

相約投淵無後先

豈圖波上再生縁

回頭十有餘年夢

空隔幽明哭墓前

隆盛